新潮文庫

山と川のある町

石坂洋次郎著

新潮社

山と川のある町

定価160円

新潮文庫 草3N

昭和三十三年十二月五日 発行
昭和四十四年八月二十日 十八刷

著者 石坂洋次郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊫ 印刷・株式会社金羊社 製本・憲専堂製本所
© Yôjirô Ishizaka 1958 Printed in Japan

新潮文庫

山と川のある町

石坂洋次郎著

新潮社版

目次

きのこ汁パーテー……七
親と子……三
宿直室……五
友人……四
女の幸福……一〇
夜の雨……一三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

間奏曲……一四五
一事件……一五九
天女の舞……一八八
山の湯の手記……二二八
留守宅……二四八
遺言……二六八

解説　平松幹夫

山と川のある町

きのこ汁パーテー

二學期がはじまる。

北國ではそのころ、秋晴れのいいお天氣がつづく。雪がこないうちに思いきり晴れてやれ——とたくらんでもいるような、意地っぱりな晴れ方だ。

空はつき抜けたように青く高く、壯麗な圓天井を描いており、太陽の光は、一日中、萬物を溫めながら照りかがやいていた。そのおかげで稻は重たくみのって、ひろい平野は、黃色な上等のジュウタンでものべひろげたような厚ぼったいながめをみせていた。そして、學校のある、このあたりの丘を吹きぬける微風には、香ばしい米のにおいが含まれているような氣がする。

さて、土曜日の授業は正午でおしまいだ。街のサイレンの音が、切通しの丘や低地のたんぼを越えて響いてくると、學校の中は、はちの巢をつっついたように、にわかに騷然となる。歸り支度をする者、當番の掃除をはじめる者、うたう者、ののしる者、わめく者、ドタバタかける足音、机かなにかを倒す音など、まあ大變な騷ぎで、校舍自體が巨大なドラムに化けて鳴り響いているかのようだった。

しかし、そうした騷音の中にも、やっと一週間の課業を終えて、これからの半日と明日はまる一日、休んでおられるという解放感がこもっているのだから、人間の氣持って不思議な働きをす

るものである。

そういうくつろいだ氣分は、職員室の中にも漂っていた。教師や生徒の出入りが絶え間なくある、ざわついた空氣の中で、用事のない先生たちはお辨當を食べていた。見ていると、さまざまな食べ方をしている。

ある者は、辨當の横に雜誌をひろげておいて、飯を一と口パクついては、急いで雜誌の活字に目を走らせる。それを根氣よく、何べんでも繰り返す。辨當がカラになるまではやみそうもない。家庭で、食事の時に、新聞を讀みながらハシを用いて細君を嘆かせるのは、こういうタイプの男たちにちがいない。

またある者は、肩を盛り上らせ、前に深くかがみこんで、辨當をひた隠しに隠すようにしながら、默々と食べつづけている。何かわるいことでもしているみたいで、ちょっと日ざわりだ。たまたまだれかに話しかけられたりすると、あわてて辨當のふたをしてから顔をあげる。これは、中にほこりが入らないように氣を配ってるのだろうが、もしかすると、自分の見つけた食物は、ほかの者に覗られまいとする、何萬年も昔のわれわれの先祖の本能が、間遠く傳わって來ているのか知れない。

それとは反對に、ひどく陽氣な辨當の使い方をしている者もある。イスに後向きにまたがって、辨當とハシをもった兩手を大きく動かし、仲間のだれかと大聲に談笑しながら、派手に食べている。オカズの鹽ザケやつくだ煮を、ハシの先きにつまんで、口の中にほうりこむのがまる見えだ。たくあんはバリバリかみ、ときどき後の机からお茶をとっては、ズルズルとすすりこむ。――お

行儀としては首をかしげさせられるが、しかしいかにも美味しそうなことはたしかだ。

あれ、おしゃべりがすぎて、ハシの先きからたくあんの切れを落っことした！　どうするのかと見ていると、イスにかけたまま屈みこんで、床のたくあんをハシでつまみ上げ、プッとほこりを吹く眞似をすると、そのまま口の中に……ほうりこみやがった！　……あの男は長生きする！　……

――國語の教師である八木敬助は、腹の蟲がグウグウなくのを抑えながら、同僚たちが食事する有様を、つまらなそうにながめていた。彼も、なかみがビッシリつまった辨當を持って來ているのだが、いましばらくはそれを食べるわけにはいかないのだ。少くも午後一時三十分がすぎるまでは――。

八木敬助は今年二十六、動作はすこしスローモーだが、身體は丈夫な方であり、したがって、腹が空いたとなると、その感覺はそうとう猛烈に、彼の胃袋や食道や舌を刺激する。じっさい、同僚の人さまざまな食事ぶりをながめて、彼はいくど生つばをのみこんだか分らない。そして、そのたびに、掛時計の針のおそい動きに目をやるのだった。

ふと敬助は、上衣のポケットから、二つ折りにしたハトロン紙の封筒をとり出した。それを引きのばすと、女の手らしいきれいな書體で、

――きのこ汁パーテーへの御招待狀――

と記されてある。なかみは、ノートを破いた紙片だが、大きな字で、

來る十月八日(土曜日)、午後一時三十分から、校舍裏の三角山のある地點で、マウ・マウ團の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「きのこ汁パーテー」を催すことになりました。ついては、このパーテーに先生を御招待しようということに、團員の衆議が一決致しました。先生には公私多端の折から、まげて御出席下さいますれば、團員の感激これにすぎたるはございません。

もし、幸いに御出席いただけるのでしたら、當日午後一時三十分、辨當御持參で、裏庭の三本杉の所までお出で下されば、團員の一人が出張して、先生を祕密の會場まで御案内する運びになっております。

なお、當方は學生という身分上、持ち寄りの資材にも限度がありますので、御招待は先生御一人ということになっておりますから、その點お含みおき下さいますようお願い致します。敬具。

マウ・マウ團

八木敬助先生

この招待狀が敬助の机の上にのっていたのは、一昨日の晝のことだった。だれがもって來たのか分らないが、いずれにしてもマウ・マウ團の團員の一人にちがいない。

いったい、マウ・マウ團というのは、アフリカかどこかに實在する、愛國的な祕密結社の名前だったような氣がする。團員は土人ばかりで、テロ行爲で片っぱしから白人をやっつける恐しい團體のように、新聞は報道していたはずだ。じっさいは、白人の方がわるいのだろうが……。

ところで、北國のK町の東高等學校のマウ・マウ團というのは、そんな物騒な存在ではない。學生の氣の合った同士がつくっている親睦團體で、語呂が面白いからというので、ふざけてマウ・マウ團を名乘ったにすぎない……。

やっと午後一時三十分がめぐって來た。八木敬助は、いくらかふんぜんとした格好でイスから立ち上り、新聞紙に包んだ辨當をつかんで、裏庭の方へ出て行った。

（人にこんなひもじい思いをさせやがって……きのこ汁一ぱいぐらいでおしまいというんだったら承知しないぞ。どいつもこいつも減點してやるから……）

空腹の氣分というものは、職業のいかんを問わず、あまり結構なものではないらしい……。

裏庭は、櫻や松やモミの並木に圍まれて、ひろい芝生になっていた。まだ多勢の學生たちが、すわったりかけたりして遊んでいた。汽車通學生が多く、汽車の時間に合せて、ここで時をすごしているらしい。

庭の地境いには櫻が植わっていたが、それに混って、あまり大きくない三本の杉がかたまって生えていた。三本杉とよばれて、なにかの目じるしにされている。

辨當を抱えた八木敬助が、あまりきげんのよくない顔で、その三本杉の所に近づくと、どこかに隱れて見張っていたのか、一年生の貝塚あさ子という女學生が音もなくかけ寄って來た。

「先生、いらっしゃい。パーテーの會場に御案内します」

そういってあさ子は、兩手を高く上げて、そのまま押しかぶさるようにうやうやしく頭を下げた。囘教徒がアラーの神様を拜んでるような格好だが、それがマウ・マウ團の正式なお辭儀の仕方なのだ。――人間は、子供でも大人でも、團體をなすと、獨特の様式をつくりたがるものである。

「やあ、ごくろう。……君も團員だったの？　知らなかった……」

「今年の五月から加盟させてもらいました」と、あさ子は得意そうに言って、先きに立って地境

いのかき根をくぐった。敬助もそれにつづいた。

貝塚あさ子は、背はまだそう伸びてないが、ハチきれそうにかた肥りしており、日鼻立ちのハッキリした顔は、筆で色をなすったように赤くつやがあり、いかにも少女らしい清純さにあふれていた。黄の半そでのセーターにグレーのスカート、黄のソックスに底高の青いズックぐつをつけ、ちぢれた髪を大きな水色のリボンで結んでいる。

二人は、かき根の外側に通じている、古い松葉が積った小みちを、上手の方にたどっていった。

「せえんせい」と、あさ子が後向きのまま話しかけてきた。

「なんだい？」

「うちではね、上級生とはあまりつき合わない方がいいと言って、私が團員になることも賛成でなかったんですけど、マウ・マウ團の規約第一條が『團員間の戀愛は認めない』ということだと教えますと、母はすっかり感激して、ぜひ入團させていただきなさいって……」

「へえ。舊式な規約があったもんだな。封建的で反動的で……お話にならん」と、敬助はニヤニヤしながら言った。

「先生、からかってるんでしょう。……それにここの男子部の學生など、そういう對象としてみると、幼稚で、おかしくって、問題になりませんわ。そうでしょう？」

「きみ、いくつだっけな」

「十六です」

「お十六か。すこしませた氣持だな……」

ふと、あさ子がヒタと足をとめた。なに氣なしに、敬助が、後から肩越しにのぞくと、山かがしと思われる大きなヘビが、スルスルと小みちを横ぎっていた。陽あたりの所では、胴體が青びかりして不氣味だった。それが、かたわらの草むらの中にはいこんでしまうと、あさ子はまた、何事もなかったかのように歩き出した。落ちついて、物の役に立ちそうな子だ――と、敬助は思った。

「こちらへどうぞ――」と、途中からあさ子は、左手の雜木林の中に踏みこんだ。

こずえからもれる日光が、地上に密生した小笹のくすんだ緑の上に、明るい、まだらの模様を浮かせていた。

何か目じるしでもあるのか、あさ子はサワサワと小笹を踏み分けて、雜木の間を右に左に曲っていく。と、人の話聲が聞え、食物の香がプーンとにおって來た。そのにおいは、あっさりした植物性のものではなく、厚ぼったい動物質のものであることを、空腹のために鋭くなっている敬助の鼻は、まちがいなくかぎ分けた。

（牛肉か豚肉か……いずれにしてもたいへん結構な心がけだ……）と、敬助は思わず舌なめずりをした。

話聲がしだいに大きくなり、食物のにおいも一そう強くなった。そして、そのあたりから、小笹がふみしだかれて、しぜんに小みちらしいものが出來ていた。

「ここが入口です」と、あさ子が指さすのを見ると、敬助の頭ぐらいの高さの木の枝に、板ぎれがうちつけてあり、雨露にさらされてうすくなった墨色で、

――東高校　野外喫煙所　ただし職員と女子學生は入所お斷り――と記されてあった。

（まあまあ、かすかながらユーモアの精神があってよろしい）

自分自身、舊制中學の三年生ごろから煙草をすった覺えがある敬助は、胸の中でそうつぶやいて苦笑した。

急に視界が明るくなった。前方に、青い空や黄一色にみのった津輕平野の展望が、遠くひろく見はらされた。そこは丘のはずれで、しかもわざわざ刈りこんだように、かなりの廣さの空地になっているのだ。

その空地には、十二、三人の學生が、固くなってすわっていた。女の子も四人ほどまじっている。中央に、太い木の枝を三本ほど組み合せたかぎがすえられ、大きなナベがつり下ってグツグツ煮えたっていた。ナベの底をたきつけている枯枝や木炭の熱氣が、そこに顔を出した敬助に、いきなりムウと觸れた。

團員たちは、敬助の姿を見ると、歡聲をあげ、拍手をして迎えた。

「どうぞ先生、こちらへ――」

三年A組の委員で、マウ・マウ團の團長でもある田村甲吉が、平野の展望が一ばんよく見える場所に、敬助をすわらせた。宿直室用のはらわたのはみ出した座蒲團まで持ち出して來てある。

「やあ、御招待ありがとう。……ところで、僕一人だけがこのパーテーに招待されたのはどういう理由なのかね？」

多勢の視線を一身に浴びせられた敬助は、少しぎこちない氣持で、そんなことを尋ねた。と、

案内役の貝塚あさ子が、

「あら、それ、私が説明するようにって言いつかっていったんですけど、先生がなんにも仰言らなかったから、默ってたんです。……パーテーには、窮屈でない程度にお客さんがあった方が樂しい。そのお客さんに先生が選ばれたんです。どうして先生が選ばれたかって言いますと、みなさんの意見では、先生は貧乏寺に下宿していて、ロクな物も食べてないらしい……」

「バカにするな」と、敬助がどなった。

みんなドッと笑い出した。

田村甲吉がとりなすように、

「いやあ、先生、要するに、なんとなく、先生をお客さんにしようということだったんです。試驗の時にリベート（お返し）を求めようなんていう企みのあるパーテーではありませんから……」

「當り前だ。きのこ汁ぐらいで買收される人間に見えるのかね、僕が――」と、敬助がまたはねかえした。

そして、そんなやりとりが、敬助をパーテーのふんい氣にとけこませるのに役立った。

「さあ、それでは女子部にサーヴィスを賴むかな」

女の學生のことを、男の學生たちは、テレて「女子部」と呼んでいるのだが、ここにいる四人の女子部というのは、三年A組の副委員をしている雄辯家の井川たか子。同じく三年B組で、東高校のヴィナスというあだ名をもつ、美貌の早川のぶ子。二年生で、繪がすばらしくうまい鳴海さち子。それから、貝塚あさ子だ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com